未知の領域を切り開く挑戦を

世界的研究者2人が北大で講演





（上）講演するベンジャミン・リスト氏
（下）自己紹介する石井裕氏

「光は、北から　北から、世界へ」と題した北海道大学創基150周年記念講演会が8月6日、学術交流会館講堂で開催された。講演会には学生や大学の教職員、一般の人々が道内外から集まった。参加者は、世界を舞台に活躍する研究者の講演に耳を傾けた。

今回の講演会には、北大の主任研究者・特任教授を務めていた2021年にノーベル化学賞を受賞したベンジャミン・リスト氏と、本学卒業生で米国のMIT（マサチューセッツ工科大学）メディアラボ副所長を務める石井裕（ひろし）氏が登壇。それぞれの研究人生を振り返りながら、これまでの研究内容や研究信念について語った。研究分野も歩んできた道も異なる2人だが、それぞれの講演からは、既にあるものを追うのではなく、まだ存在しないものを生み出そうとする研究者として共通した姿勢が感じられた。

リスト氏が挑む「Crazy Idea」

リスト氏は、自身が専門とする触媒分野について、光合成や工業などの例を交えながら紹介した。触媒は化学反応を促進する物質で、食料やエネルギー、医薬品など、私たちの生活を支える様々な場面で利用されている。

自身の研究について振り返る中で、リスト氏は若手研究者だった頃の「Crazy Idea」について語った。当時、化学反応を促す触媒には金属が必要だと考えられていたという。しかしリスト氏は、小さな有機分子を触媒として利用できないかと考え、アミノ酸の一種であるプロリンを用いた実験に取り組んだ。この発想は後に「有機触媒」という大きな研究分野へと発展し、ノーベル賞受賞につながった。

現在もリスト氏は、新たな「Crazy Idea」に挑んでいる。講演では、地球温暖化の原因の1つである二酸化炭素を、炭素と酸素に分解する構想を紹介した。一見すると実現が難しいようにも思えるが、リスト氏は「常識外れなアイデアなしに、革命的な発見はあり得ない」と語り、不可能だと証明されない限り挑戦を続ける姿勢を示した。

石井氏が掲げる研究者像

一方、石井氏は自身の研究者としての信念や生き方を、「出杭（でるくい）力」「道山（そうざん）力」など、独自の言葉を使って表現した。

「道程力」を説明する中では、研究を走りに例え、「誰も分け入ったことの無い原野を1人切り開き、そして生まれていない道を1人全力疾走する。そこには観客も審判もストップウォッチもない」と語った。

さらに石井氏は「道山力」という言葉を用い、既に存在する山の頂上を目指すだけではなく、まだ存在していない山そのものを想像し、一般の人々が道内外から集まった。参加者は、世界を舞台に活躍する研究者の講演に耳を傾けた。

今回の講演会には、北大の主任研究者・特任教授を務めていた2021年にノーベル化学賞を受賞したベンジャミン・リスト氏と、本学卒業生で米国のMIT（マサチューセッツ工科大学）メディアラボ副所長を務める石井裕（ひろし）氏が登壇。それぞれの研究人生を振り返りながら、これまでの研究内容や研究信念について語った。研究分野も歩んできた道も異なる2人だが、それぞれの講演からは、既にあるものを追うのではなく、まだ存在しないものを生み出そうとする研究者として共通した姿勢が感じられた。

リスト氏が挑む「Crazy Idea」

リスト氏は、自身が専門とする触媒分野について、光合成や工業などの例を交えながら紹介した。触媒は化学反応を促進する物質で、食料やエネルギー、医薬品など、私たちの生活を支える様々な場面で利用されている。

自身の研究について振り返る中で、リスト氏は若手研究者だった頃の「Crazy Idea」について語った。当時、化学反応を促す触媒には金属が必要だと考えられていたという。しかしリスト氏は、小さな有機分子を触媒として利用できないかと考え、アミノ酸の一種であるプロリンを用いた実験に取り組んだ。この発想は後に「有機触媒」という大きな研究分野へと発展し、ノーベル賞受賞につながった。

現在もリスト氏は、新たな「Crazy Idea」に挑んでいる。講演では、地球温暖化の原因の1つである二酸化炭素を、炭素と酸素に分解する構想を紹介した。一見すると実現が難しいようにも思えるが、リスト氏は「常識外れなアイデアなしに、革命的な発見はあり得ない」と語り、不可能だと証明されない限り挑戦を続ける姿勢を示した。

石井氏が掲げる研究者像

一方、石井氏は自身の研究者としての信念や生き方を、「出杭（でるくい）力」「道山（そうざん）力」など、独自の言葉を使って表現した。

「道程力」を説明する中では、研究を走りに例え、「誰も分け入ったことの無い原野を1人切り開き、そして生まれていない道を1人全力疾走する。そこには観客も審判もストップウォッチもない」と語った。

かつての北大新聞から読み解く「アイヌ遺骨問題」

ここでは、北大による遺骨収集の事実の信憑性を検証するために、かつて北大新聞（当時は北海道帝國大學新聞）に掲載されていた記事を2つ取り上げる。

まずは、昭和7年（1932年）12月15日発行の第104号に掲載された、昆虫学教室所属の河野廣道氏の寄稿文を紹介する。これは、河野氏が発寒村で発見された遺跡を訪れた際の様子を記したものである。

アイヌの墓は約四百年乃至四百五十年位前のもので、大体室町時代と推定される。墓塘は二つ並んで居るが、その内一には人骨が三体あり他のものには二体あった。第二のものはのべて（以降〇は識読不可）臥葬し、その後又一体を埋める時に下に人骨があったので上に屈葬にしたらしい形跡を有する。骨格の性別は何れもまだ判然しない。（記事より抜粋）

この記事は「貴　北大は研究目的でアイヌの遺骨収集を行っていた」ことが明らかな事実だと示している。

次に、昭和9年（1934年）6月18日発行の第129号に掲載された、解剖学教室の児玉教授一行が北海道八雲町を訪問したことについての記事を紹介する。

八雲にがてアイヌの遺骨を発掘中であった解剖学教室の児玉教授の一行は完全なる遺骨三十〇〇の外貴重なる土器の数々の大収穫を得て先づ〇〇し大学に帰った。（記事より抜粋）

この記事には「大収穫」「大なる貴重献」といった興味深い表現がある。これは、当時北大においてアイヌの人々の解明が切望されており、その過程における遺骨収集が肯定的に捉えられていたということを示している。

創基150周年という節目に直接立ち会っている北大生には、特にこの問題に真摯に向き合う姿勢が求められている。

（取材・執筆：和田）



10月号

＜編集・発行＞
北海道大学新聞編集部

＜ウェブサイト＞
「THE MAINSTREET」
hokudaishinbun.com

ウェブサイト　X（旧Twitter）（@HokudaiShinbun）

ウェブ上で様々な記事を更新中！



CONTENTS

▼北大構内で自転車の盗難多発　…2面
▼戦中・戦後の北大新聞を振り返る　…4・5面
▼AIサークルがアプリ開発　…7面
▼エスコンで北大生が躍動　プロ・アマ交流戦　…7面

北海道大学新聞　創刊100周年
北大新聞は皆様のおかげで2026年5月14日に創刊100周年を迎えました
活動継続のためご寄附を募集しています
寄附口座のご案内
北大新聞HP「THE MAINSTREET」

北大新聞100周年
報道の第二章へ

1926年5月14日、北海道大学新聞（当時は北海道帝國大學新聞・以下北大新聞）は北の大地で産声をあげた。

大学生が自ら筆をとり記事を書く。そのシンプルで深い営為が実に100年もの間続いてきたことに驚くとともに、北大新聞を100年間支えてきた先人たちに、この場をもって深く敬意を表する。デモクラシーが、戦争が、学生闘争が、技術革新が、事故や事件が、そして疫病が去来した100年。時代ごとに入れ替わり続ける学生たちが限られた在籍期間の中で残した数多くの記事は、今なお北大の歴史を語っている。その間に北大新聞は2度の休刊・廃刊を経験し、大学新聞を存続させることの難しさを誰よりも知っている。

北大新聞の歩んだ軌跡への詳細な言及は、100周年に際して展開されている連載『LOOKBACK北大新聞』に譲るとして、ここでは大学新聞という媒体自体への回顧を試みたい。

＊＊＊

100年間の中で、大学新聞の置かれる立場は確実に変化してきた。それは社会の変化でもあり学生の変化でもあり大学自体の変化でもあった。

全国の多くの大学新聞は、大正デモクラシー末期の1920年代に誕生した。学校令により数を増した大学生たちは自由な言論空間を希求し、圧倒的な拡散力を持つメディア「新聞」の発行を始めたのである。大学新聞自体が社会的な存在意義を強く持っていたため、学生たちの紙面は大学広報の役割も担った。北大新聞に児玉作左衛門の研究内容、中谷宇吉郎の功績、宮澤弘幸の寄稿などが載っていた事実も、情報拠点としての大学新聞の確かな役割を示している。

しかし1930年代以降、自由な言論は軍部の介入を受けるようになり、戦中にはプロパガンダの担い手になった。大手新聞さえも新聞統制を受け姿を消す中で、かつての学生たちはここで一度筆を折る。学生として学ぶことができなかった時代、その時大学新聞は息を潜めるのだと歴史が示している。

そして戦後、抑圧からの解放感とGHQの政策を追い風に成長した大学新聞は、間違いなく以前と異なる形に変わった。学生運動が全国の大学を揺るがした時期に、粗削りな学生の主張を載せ特定の党派・勢力を代弁した過去は忘れようがないだろう。

その反動の様なのか、1980年代以降に大学新聞は学内情報のプラットフォームへと変化しキャンパスライフや就職活動といった内容を主軸に扱うようになった。そして2010年以降は特にジェンダー・環境問題・グローバル化といったトピックにアンテナを張る大学新聞が多い。

大学当局のPR誌として、時に国家の宣伝機関としてまた学生運動の機関紙として——大学新聞は常に「誰か強い立場の声を代弁させられかねない危うさ」と隣り合わせであり続けてきた。熱しやすい「学生」が書き手である以上、中立性を保つ難しさは大学新聞の宿命であり、100年間つきまとってきた。そうした荒波の中で、大学新聞は2つの潮流の間で揺れ動き続けている。

ある時代には社会問題に鋭く切り込み、学生自身の意見や批判精神を前面に出す紙面が求められた。また別の時代には、声高な主張よりも学生の日常、サークルや研究室の何気ない風景に光を当てることが求められた。

いずれにしても「学生自身の視点・思考を基にする」という姿勢は一貫していたはずだ。学内の問題を明るみにし社会への問題提起をすることが、学生の日常や活躍を学内外へ伝えること、その時々の大学の姿をありのままに記録すること。記者と取材相手の独自のコネクション、緊密な距離、学外に出てこない記事ネタといったものが、大手メディアにはまねできない財産であった。学生にしか担えないこうした役割・財産が、大学新聞という存在の強みそのものである。

だが現在大学新聞はこうした強みを失い、かつてない窮地に立たされている。SNS時代の今、学生の意見はもはや紙面を経ずとも、投稿ひとつで容易に世間の目に触れる。大学生活やキャンパス内での活動も、当事者本人の発信や大学広報のアカウントによって世に流れていく。その速さと細やかさは我々大学新聞の取材が追いつかないほどである。かつて大学新聞が半ば独占的に担ってきた役割は、誰もが担えるものへと変容してきた。

さらに新聞そのものの地位も危うい。大手新聞社さえ経営に苦しむ時代、大学新聞も資金難に直面している。紙面の購読収入で黒字化できる大学新聞はわずかで、大半は部費や大学からの支援・OB等からの寄付、広告収入で活動を続けている。赤字により紙面発行停止や廃刊に追い込まれることも珍しくない。また部員の減少、相次ぐ廃部、紙面発行の終了とネットメディアへの転身など、大学新聞独自の問題は様々な形で山積している。

＊＊＊

100周年の祝辞で紙面を埋められるほど、大学新聞の現状は甘くない。これからの時代に大学新聞に求められる物は何か。一つは中立性を備え開かれたプラットフォームでありながら、学生ならではの色や熱を失わないことだろう。また辛うじて新聞が握っている「メディア」という肩書を無闇に手放さないことも必要になる。影響力が相対的に減衰したとはいえ、大学新聞はあくまで新聞である。

我々の報道が時に大手報道機関からも「記事にしてほしい」と申し込むことができるし、当局に公式な取材・質問を申し込むことができる。少なくとも北大新聞は大学広報機関ではない。学生ひとりでは知りえない情報、聞きづらいことを問う鍵を大学新聞は握っている。これらは先人たちが100年の歳月の中で築いた立場の上に成り立つものであって、一朝一夕で得られる物ではない。

幸いにして大学新聞の新しい形は各地で芽吹き始めている。存続する新聞がネット時代への適応策を模索する一方で、かつて新聞が廃刊した大学に全く異なるネットメディアが誕生する例もある。紙面はおろかHPも持たないが、note やX（旧Twitter）のみを舞台に報道を行う人々もいる。かつて一画一的であった大学新聞は、その生き残りと再生の過程で多様な姿に変わりながら生きているのである。

そもそも、大手新聞・新興のネットメディア・大学新聞・個人のインフルエンサー——それぞれの境目がもはや判然としない。情報発信は記者の特権には無くなったのだ。加えてAGI（Artificial General Intelligence 人工汎用知能）の誕生も近いと言われる中、文字を綴ることも人間だけの能力でなくなった。それでも、先述の様に記事を書き続ける大学生は各地にいる。だからこそ、我々は今一度原点に立ち返って問い直す必要があるだろう。

「なぜ私たちが、なぜこの媒体で、誰に伝えるのか？」

AGIにあやかって言うなら、大学新聞にもAGIの時代が来る。大学社会（Academia）のメディアとして、学生が集う情報の広場（Agora）として、学生独自（Alternative）の視点を提供する存在へ。3つのAを抱える新聞（Gazette）が挑む改革（Initiative）の時代である。

＊＊＊

北大新聞は100周年を迎えた。大学や社会に同調的に、時に批判的に、自らの居場所を探り続けてきた大学新聞は、様々な勢力の台頭で窮地に立っている。だが易々と手放せるほど軽い立場ではない。

100年後も大学新聞がこの世に存在しているか、正直なところ誰にも分からない。だがその時、我々と同じ志を抱いた同年代の若者たちが記事を執筆できるように願っている。そのために我々大学新聞は、これからも報道を続けるのである。

大学新聞の第二章へ、ようこそ。

（執筆・創刊100周年企画編集長：古谷）

HOKKAIDO CHUO DRIVING SCHOOL
夜間10時まで教習　土日祝日も教習・検定実施
地下鉄 北24条駅 徒歩・約8分
北海道中央自動車学校
〒065-0025 札幌市東区北25条東1丁目1-17 ☎011-711-3344

写真集 北大150年
北海道大学150年史編集室編
北海道大学の150年にわたる歩みを収めた写真集。建物や施設の写真だけでなく、学生どうしの集合写真や、当時の学生がどのような環境のもとで学んでいたのかが見えてくる構成となっている。精神（こころ）を超えて受け継がれてきた北大の歴史を、精神（こころ）に刻む一冊。
【2025年10月刊行・好評発売中】 9800円

北大と北大生の150年
北海道大学150年史編集室編　札幌農学校開校を起点として、創基150周年にあたる2026年までの150年をコンパクトにまとめた年表。北海道大学の通史、多数の写真・資料とともに歩んできた北大生の「姿」を丁寧に辿る。
【2026年3月刊行・好評発売中】 2970円



北大キャンパスガイド
北海道大学COSTEP・北海道大学総務企画部広報課・北海道大学生協同組合編　受験生、新入生、編入生、卒業生、北海道大学に関心を持つすべての方へ。キャンパスを楽しむためのガイド。
【好評発売中】 1980円

札幌農学校教授 ウィリアム・ペン・ブルックス
―生涯とその時代
赤石恵一著　誕生間もない札幌農学校の農学教授として1877年に25歳で来日し、北海道農業の近代化に多大な功績を残したブルックスの伝記。
【好評発売中】 11000円

小林快次北大教授らが語る 古脊椎動物学
小林快次編著　素朴な疑問から、「研究の最前線にたつ」までが詰まった問いまで、Q&A方式の解説で、古脊椎動物の魅力をわかりやすく伝える。
【2026年7月刊行・好評発売中】 2420円

北海道大学出版会　〒060-0809 札幌市北区北9西8 北大構内　Tel. 011(747)2308　Fax. 011(736)8605　https://www.hup.gr.jp/　［価格は10%税込］

北大闘争と北大新聞会
かつての北大生が語る

1968年に東京大、日本大などで発生した大学闘争の波は、北大にも及んでいた。構内の至る所で主義・主張が叫ばれ、武装闘争にまで発展することもあった時代。そのさなか、北大新聞会のメンバーはどのようなスタンスで活動していたのか。大嶋薫さん（1970年法学部入学）、大橋俊男さん（1968年農学部入学・北大新聞会OB）、野田正彰さん（1963年医学部入学・北大新聞会OB）に話を聞いた。

1960～70年代の北大の雰囲気

ベトナム反戦運動や1960年の安保闘争をはじめとして、構内で学生運動は広がりを見せていた。学生自治会やセクトの活動が盛んになり、学生は日夜議論を交わしていた。「何人かクラスの仲間で酒を飲みにいっても、喫茶店に行っても、文学論とか哲学論をガンガン議論していた」と大嶋さんは語る。運動の激化に伴い、立てこもりやゲバルトなどにより逮捕者や死傷者が出ることも珍しくなかった。

1960～70年代の新聞会の組織形態

北大新聞はかつて北海道大学新聞会という名称だった。「略称『聞会（ぶんかい）』と呼んでいた」と大橋さん。学生会館（現・インフォメーションセンターエルムの森）2階の西側に大きな部室を持ち、月2回、4～6面、15段で紙面を発行していた。1文字ずつ活字を並べ転写する活版印刷の時代であり、紙面発行には多大な労力がかかったという。実際、文字が逆向きになるなどの誤植も多かったそうだ。部室には電話が1つ置かれており、会員はいつでも使用できた。当時の代表者は大学総長、顧問は布施鉄治氏だった。また面接・作文による入会試験が実施されていたり、給料を出して事務員を雇ったりしていたそうだ。現在の北大新聞はホームページでの情報発信が主で紙面発行は年2回、部室を持たず活動しているが、それとは運営形態が大きく異なっていることが窺える。

自分の名前が選出から新聞会に

1968年当時、教養部（現在の総合教育部）の各クラスで反戦運動組織が構築され始めていた。組織運動論に興味のあった大橋さんは、クラス約60人のうち約40人を組織に組み込んだ。これは教養部最多の人数であったようだ。年次が上がると、北大新聞会の活動として北大の他に小樽商科大、帯広畜産大、札幌大、藤女子大などが加盟する北海道学生新聞連盟での委員長も務めた。

大橋さんは「僕は東京出身で北大に来たのですが、それまでは喋るのと書くのが大っ嫌いだったんです。北大に来た瞬間に、自分で自分を変えなきゃいけないと思ったんでしょうね。教養のクラスで自治委員に立候補したんです。そしたら、みんなの前でいきなり喋ることができて、あんなに喋るのが嫌いだった奴が。『もしかしたら書けるかな。よし、新聞会行こう』と。それからちょっとずつ書き始めたんですね」と語る。

野田さんも、初めから北大新聞会に入ろうとしていたわけではなかった。中学・高校と山岳部。当時北大からも人員が派遣されていた南極地域観測隊に、医学部のクラスは約90人入学時にクラス全員が北大医学部に入った動機を書かされた。それを読んだ担当教員に呼び出され、自治委員に指名されたという。

「アーと言えばよかったものを、言われたら受け入れるものだと思って自治会に行ったんです。教室の後方に各セクトの大先輩がずらーっと並ぶわけですよ。手稲の山に夕日が落ちぬ頃、彼らが前のほうへ出てきて演説したり殴りかかったりし始めました。ショックだった。殴ったことじゃない。言ってる言葉が全然理解できないことがショックだった。『なんとかをしつつ、乗り越えつつ―』ってね」。

彼らの言葉を理解するためにはどうすればいいのか。野田さんは経済学部3年の先輩に相談した。先輩の提案は2つ。ヘーゲルの「大論理学」を読むこと、そして北大新聞会に入ることだった。野田さんは提案通り高価で長編の「大論理学」を購入して読み、北大新聞会に入った。「それが、私の人生の誤りの始まりです」と冗談交じりに呟く。

学生運動の渦中にあって

北大創基90周年記念特集号の、野田さんが執筆した記事を見せてもらった。社会・経済の動向に関して戦後の北大史をもとに論述されている。この紙面に掲載されている絵は、登山家・画家である坂本直行さんから提供されたものだ。野田さんは度々坂本さんのもとを訪れ、新聞記事の挿絵の提供を頼んだそうだ。坂本さんは、毎回喜んで絵を描いてくれたという。



北大創基90周年に際して野田さんが執筆した記事

現在の北大新聞には「畝き（たたき）」という文化がある。編集長を設置していないため、執筆された記事を部員同士で掲載前に推敲・校正しているのだ。野田さんと大橋さんによると、少なくとも1960年代後半時点ではこの言葉は使われていなかったという。「もちろん他の部員が書いた記事は読んでいた。それは相手への礼儀ですから」と野田さん。

むしろ、日常的に議論を重ねていたという。「時に『文章が下手だ』『この部分についてはお前と意見が違う』と言い合うこともあった。けれど北大新聞会として立場を統一させようとしたりするようなことはお互いになかった。みんなそれなりに良いものを書いてくるんだろうなと尊敬していたから」とのことだ。

（取材：大畑・品村・吉村、執筆：大畑、撮影：吉村）

続きは北大新聞公式HP「THE MAINSTREET」で公開中

市内7方面へ運行中！
無料送迎バス
札駅～北24条間の地下鉄駅付近にも毎日運行しています！
桑園自動車学校　☎011-271-7511

学チカにも強い！
マーケティングチーム
イベントスタッフ募集中
時給1300円～
日払い　スポットワーク　未経験OK！　研修あり
インセンティブあり！交通費実費支給！
未経験の学生・主婦など様々な人が活躍しています！
㈱朝日サービス
〒060-0001　札幌市中央区北1条西1丁目6番地　さっぽろ創世スクエア9F　詳しくはこちら▶

150年の歴史を白球でつなぐ
北海道プロ・アマ交流戦で北大生が躍動

8月14日午後6時、屋根が開いたエスコンフィールドHOKKAIDO（以下、エスコン）に、ボールがミットに収まる乾いた音と、選手たちの掛け声が響く。打席に立つのは、道内の社会人・学生野球を代表する選手たち。対するは、北海道日本ハムファイターズ（以下、日本ハム）のファーム（2軍）選手である。

この日行われたのは、北海道大学創基150周年記念事業の一環である「北海道プロ・アマ交流戦」。北海道社会人・学生選抜（以下、選抜チーム）が日本ハムのファーム選手と対戦した。北大からは、硬式野球部の高橋建杜（けんと）外野手（医学部4年）と太田和佳（のどか）マネージャー（教育学部4年）が参加し、プロ野球の本拠地で躍動した。

野球と北大、150年のつながり

北大の前身である札幌農学校は、試合当日のちょうど150年前、1876年8月14日に開校した。その翌年に米国人教師のダビット・ペンハローが学生たちに野球を教えたことが、北海道の野球の始まりとされる。

そうした北大と野球の深い関わりを背景に、2008年から続く北海道プロ・アマ交流戦が北大創基150周年記念事業として開催された。同交流戦はコロナ禍による中断などを挟みながら道内各地の球場で開催され、2024年からはエスコンに舞台を移している。

北海道野球協議会事務局長の柴田邦弘さんによると、試合日が開校記念日と同じ8月14日になったのは偶然だったという。「アマチュア野球ファンだけでなく、プロ野球ファンも注目する一戦にしたい」と意気込んだ。

150周年を祝う一投

始球式には、資金清博総長が登板した。

試合前に取材に応じた資金総長は「150周年の記念として、このような試合を設けていただいたことにひどく感謝している。北大の選手にも出場のチャンスがあったら嬉しい」と話した。自身が臨む始球式については、「エスコンで投げるのは初めてなのでとても光栄」と笑顔を見せ、「精一杯やらせてもらいたい」と意気込んでいた。



資金総長の投じた球がキャッチャーミットに収まる様子

始球式本番、資金総長が山なりの球をキャッチャーミットへまっすぐ投じた。スタンドが拍手に包まれると、18時、試合は幕を開けた。

1点を追う選抜チーム、4回から反撃

試合は2回、日本ハムが1点を先制する。追う選抜チームは4回、石川楓雅選手（JR北海道硬式野球クラブ）のタイムリーで同点に追いついた。

6回には、日本ハムの守備の乱れに乗じて勝ち越しに成功。さらに9回、安田大将（だいすけ）選手（北海道ガス）がホームランを放ち、リードを2点に広げる。選抜チーム投手陣も日本ハム打線を抑え、3対1で試合を締めくくった。

近年の交流戦では引き分けや敗戦が続いていた選抜チーム。序盤に先制を許したものの、試合中盤から逆転し、勝利をつかんだ。

「結果で示せてよかった」

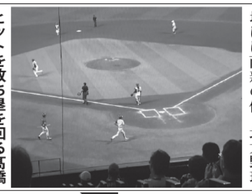
北大から選出された高橋選手も、8回、代打で与えられた打席で二塁打を放った。

「一塁を回るころに『打ててよかった』と実感が湧いた」と振り返る高橋選手。球場には両親の他、北大野球部の同期や後輩も応援に訪れていた。「見に来てくれた人たちに、ひとつ結果で示せてよかった」と笑顔を見せた。

ベンチでスコアをつけていた太田マネージャーも、同じ部で活動してきた高橋選手の一打を喜んだ。「長く怪我に苦しんでいたので、誰よりも近くで結果を出す瞬間を見ることができたのが嬉しかった」と語る。試合後には「アマチュアの負けや引き分けが続いていた中で、今年勝つことができて、すごく嬉しかった」とチームの勝利を喜んだ。

交流戦の翌日からは、北大野球部として秋季リーグ戦に出場する。太田マネージャーは「本気で1部リーグへ昇格できるように頑張っていきたい」と、次の戦いを見据えた。

（取材・執筆・撮影：赤松）



ヒットを放ち塁を回る高橋選手と、沸き立つスタンド

「NoMaps」公認を目指して――
AIを活用したアプリ開発の裏側に迫る

北海道大学AIサークル（以下、AIサークル）は今年2月に設立されたサークルである。代表の深澤ヒロイさん（工学部4年）が、「AI（人工知能）を口実に、やりたいことを本気で形にできる仲間の場」が地域にないと感じたことが設立のきっかけとなった。サークルには43人が所属しており、「やりたい」ことを、誰かの〝価値〟に」をサークルの合言葉にしている。現在は、毎週水曜日に開催されるAI活用の勉強会を通じて、AIという道具の魅力を広めつつ、それぞれのAIリテラシーを向上させることに取り組んでいる。

AIサークルは、9月23日から27日にかけて札幌市で開催される「NoMaps2026」の「student's」カテゴリに参加する。「NoMaps」とは2016年から毎年札幌市内で行われているコンベンションだ。北海道を舞台に、新たな価値の創造に励む人々が交流する場となっている。

現在、AIサークルは「NoMaps」のイベント当日に参加者が会場で利用することが可能な、イベントを最大限に楽しむためのアプリを開発している。アプリの出来次第では「NoMaps」から公認をもらうことができるため、より高いクオリティを求めているそうだ。

今回は、現在のアプリ開発の状況について太田哲惺（てっせい）さん（農学部2年）と小野寺奏水（そうす）さん（工学部2年）に話を聞いた。

「MyMaps」という名のこのアプリには多くの魅力あふれる機能が備わっている。

1つ目は一人ひとりに合わせた企画がおすすめされる。2つ目はイベントの展示である。自分の位置とイベント会場の場所が分かるマップの表示に加え、参加予定のイベントの開始時間が整理されている。

「アプリを作る過程では、常に面白さを感じている」と2人は語る。太田さんは、「AIを使うことによって、自分が想像したことを具体的に形にすることはとても面白い」と語る。小野寺さんは「AIについて議論を深めていく中で、AIの新たな可能性に気づくことに面白さを感じている」と話した。

最後に、今後のサークルの展望について語ってもらった。太田さんは、「AIはあくまで1つの手段にすぎないので、最初に自分で考える人材の増加を目指したい」と話した。小野寺さんは「AIの正しい活用法をもっと多くの人に伝えることで、大学生の中にも存在しているであろう『AIはズルの道具』という固定概念を壊したい」と語った。

AIサークルは文系理系問わず、メンバーを募集している。自分の作業を効率化したいと考えている人は、ぜひ一度勉強会に参加してみてはどうだろうか。

（取材・執筆：和田）

えるむ歌壇　【第十五回】

もう生きていけない蝉を掃き出した端から落ちてくる青い栗／空木洞
君がいれば月がなくてもいい夜でほぐして食べるモンブランパフェ／大崎素直
大学に行きたくないな　食パンを洗濯ばさみで吊るしてみたり／小西電波
倒壊の危険があかるい東屋に雨を凌いでなくても話す／斉東司
灰色と青と薄めたオレンジで描いても描けない雲　ちぎり取る／穂高

提供：北海道大学短歌会

AFC ASAHI FAMILY CLUB
参加登録募集中
アサヒファミリークラブ（AFC）は朝日新聞北海道支社オリジナルの会員制クラブです。
詳しくはこちらから
特集　プレゼント　連載　イベント
AFC

北大の「今」を発信中！
ウェブサイト（THE MAINSTREET）
X（旧Twitter）（@HokudaiShinBun）
THE MAINSTREET
Powered by 北海道大学新聞編集部

夜の北大 12カ月
石は語る

創基150周年を迎える北大は、四季折々の顔を見せるキャンパスの美しさが売りの一つである。しかし、多くの人々が目にするのは人があふれる昼の顔にすぎない。本コラムは、北大の夜の顔を覗き見て、その美しさを見出すことを旨とする。例年にない蝦夷梅雨が明け、夏の彩を携えた札幌キャンパスは、どのような顔を見せるのだろうか。

7月26日午後10時――。期末試験の勉強を終えた記者が学部の建物を出ると、メインストリートの人けはまばらになっていた。テスト期間のせいか、走り込みをする学生の数は心なしか少ない一方、建物には煌々と光が灯っている。

涼しい夏を迎えた北海道。日中の喧騒を忘れて札幌キャンパスを散策してみるのはどうだろうか。散策のテーマは「石」、物言わぬそれは多くを語ってくれる。

まずは北大正門から入ってすぐ右手に見えてくるのが「大志を抱いて」という石碑である。北大の前身・札幌農学校で教鞭をとったクラーク博士の「少年よ大志を抱け」に呼応するかのように刻まれた言葉は、北大の発展を願っているという。道南・アポイ岳から運んだかんらん石でできた石碑の裏側には「北海道大学予科記念碑」と記され、1950年までの半世紀近く北海道の教育を支えてきた「予科」の名を残している。


夜中になっても明るい空を背景に仰ぐクラーク像

折角なのでクラーク博士の像にも会いに行こう。サクシュコトニ川が流れる中央ローンの傍を通って行くと左手に現れるのが博士の胸像である。羊ケ丘展望台にある全身像と勘違いした観光客が訪れることも多々あるが、夜10時、さすがに人影はない。

北大の始まりを記すのが「クラーク博士像」だが、実はその設置は「創基50周年」の出来事、創刊したばかりの北海道帝國大學新聞にも記事が載っている。

2026年7月31日で、生誕200周年を迎えたクラーク博士。彼が北大に滞在した僅かな時間は、今なお大きな跡を残している。

そしてクラーク博士の目線の先にある一つの石碑は、違った歴史のターニングポイントを記している。

「閑院宮載仁親王殿下篆額（かんいんのみやことひとしんのうでんかてんがく）」と冒頭に記された石碑。

その大きさの割に文字は小さく、目線より少し上に文字があるせいか人が目に留めることはほとんどない。

忘れられつつある過去を記した石碑は他にもある。

メインストリートを少し南下してクラーク会館前に来ると、道路西側に「七大戦茲に始まる」という石板が見えてくる。こちらは記されている通り、第50回七大戦（国立七大学総合体育大会（現全国七大学総合体育大会））の開催を祝したもので「北の地北海道において一九六二年記念すべき第一回大会が開催された」と当時を振り返っている。

昨年度は北大が主管校となり、史上初の連覇を果たしたことでも記憶に新しい七大戦。その始まりが、この北大であったことはあまり知られていない。

クラーク会館前の道を西に進むと、石山通を行き交う車の音が聞こえてきた。その手前にひっそりと佇むのが「桑園学寮」の記念碑だ。

昭和24年に北3条西11丁目に創設され、昭和36年に移転した桑園学寮。かつての北大男子学生を支えた一大拠点も、昭和58年に閉鎖され、今ではその場所に石碑が残るのみとなっている。

網の目の様な農学部・理学部の建物裏を通って北に歩みを進めていくと、背の高い並木が見えてきた。闇夜に黒々としたシルエットを浮かび上がらせるのが、北大観光名所の一つ、ポプラ並木。そしてそのほぼ真下にあるのが、知られざる新渡戸稲造の顕彰碑である。

北大を代表する卒業生として「新渡戸カレッジ」などに名前が残る人物、新渡戸稲造。クラーク像と異なり、人通りの多いメインストリートから離れているため、顕彰碑の存在を知らずに卒業する学生も少なくない。

「札幌農学校創設から数えて一二〇年を数えるのを記念し、卒業生らを中心として数千人の篤志家の浄財によって建立された」と説明される顕彰碑。木々に囲まれており、残念ながら夜に訪れると姿を見にくいが、ライトで照らせば特徴的な丸眼鏡をかけた新渡戸のどっしりとした姿が浮かび上がる。


暖かい光の漏れるエンレイソウと人工雪誕生の地

なお、新渡戸像の前を横切る道路が「新渡戸通り」と名づけられており、北大を東西に走る。太平洋の橋にならん――そう願った新渡戸の『道』は、今キャンパスの端と端を繋いでいる。

新渡戸通りを辿ってメインストリートに戻ってきた。明々と営業を続けるセイコーマートの前には、アイスを片手にくつろぐ学生の姿がある。

対岸に見えるのが続いての石碑「人工雪誕生の地」。北大教授として雪の研究に取り組んだ中谷宇吉郎が世界で初めて人工雪の製作に成功したことを記念するもので、雪の結晶を模した六角形の石碑だ。

彼の功績もあって、現在でも北大の低温科学研究所は研究のトップを走っており、中谷の最初の実験装置はそこで保管されている。

石碑の裏手にはオープンノベーションハブ・エンレイソウの暖色の光が漏れていた。

その努力を表した「何時までも根気よくやってみれば（中略）必ず出来る」という言葉に従うかの様に、10時半を回ったエンレイソウには、勉強する数多くの学生が残っている。

さらに北上を続けていると東側に見えてくるのが「北大医学部」の石板。石に刻まれた学部看板は珍しいが、敢えて別の「石」に目を向けてみよう。医学部建物の噴水を回り込むと石像が見えてきた。

こちらは「醫博士（いがくはくし）今裕」の像。1918年に北大農学部に着任したが、北大に医学部がないことを受けて創設に尽力した立役者として知られる。医学部生を眺めている。

最後に北大最後の秘境とも名高い「恵迪寮」にまつわる「石」を見に行ってみたい。工学部と北図書館の間を抜けて道なりに歩いていくと、鬱蒼とした森が出迎えてくれる。森の入口にあるのが「明治四十五年恵迪寮歌」だ。

毎年新たな寮歌が生まれる恵迪寮。中でも歌い継がれる「都ぞ弥生」の歌詞を刻んだこの石碑は、恵迪寮へ伸びていく道のプロローグと言っても良いだろう。


蚊を避けながら5m程進むと石碑に辿り着く

実はこの石碑は「北区自然と文化の八十八選」に選ばれている。また「都ぞ弥生」自体は札幌市内の様々な場所に歌詞が掲示されている。北大生のみならず、北区民、そして札幌市民にとって欠かせない一曲、その印が木々に囲まれている。

都ぞ弥生を口ずさみながら進むと、右手にもう一つの石碑が見えてくる。「恵迪寮創成期遺跡」。寄宿舎跡の碑である。

「明治九年札幌農学校開講ニ当リ北一条西二丁目ニ寄宿舎開設セラル（中略）明治四十年舎名ヲ恵迪寮ト定メ（中略）昭和五十八年新寮含ノ開設ニヨリテ閉寮解体セラル」と恵迪寮が歩んできた長い歴史を端的に綴った文面からは、寮がたどった長い変遷を感じ取ることができよう。

「迪（みち）に恵え（従う）」という学生としてもあるべき姿を刻んでいる。

石碑は寮への道から少し外れた場所にあるものの、道路から石碑までは草の踏み跡がくっきりと残っているうえ、石碑自体が綺麗に手入れされている。頻繁に人が足を踏み入れることが窺い知れる。道理に従う思いは寮生に、継承されているのかもしれない。

恵迪寮前まで歩いてくると外壁を覆うツタの間から部屋の光が漏れていた。外壁の綺麗な学部棟から漏れる研究室の明かりとは違う趣が、ここにはある。

農場の手前まで抜けると、農場の暗がりの奥に札幌駅周辺のビル群の光を見る事ができた。北大キャンパスも札幌も、まだまだ眠らないようである。

散策の末に、道をたどり道を知る。夜の北大を巡ると、まだ知らない北大が見えてきた。

（執筆・撮影：古谷）

ASAHI FAMILY CLUB
PREMIUM PRESS
朝日新聞のデジタル版
現役大学・大学院生
活用術
登場!!
元北大新聞部部長
詳しくはこちら

北大の「今」を発信中！
ウェブサイト（THE MAINSTREET）
X（旧 Twitter）（@HokudaiShinBun）
THE MAINSTREET
Powered by 北海道大学新聞編集部

知と未来への扉
「こども本の森 札幌・北大」オープン


大きな窓のある開放的な空間
小中学生向けの本が並ぶこども本の森札幌・北大

北大に新たな学びの場

北大のキャンパスに8月1日、世界的な建築家・安藤忠雄氏が設計・建築を手がけた「こども本の森札幌・北大」がオープンした。安藤氏が手がける「こども本の森」シリーズとしては6館目で、大学構内に設けられるのは初めてとなる。

運営は札幌市、管理は北大が担う。小中学生を主な対象としながら、絵本から専門書、外国書籍まで約1万4千～1万5千冊をそろえる。絵本は約3千冊、文学や物語だけでなく、北海道、自然、社会、芸術、建築、宇宙など、幅広い分野の書籍が並ぶ。

この施設の大きな特徴は、大学という学術の場に子どもたちが自然に触れられることだ。館内には北大の各学部に関連する本を集めたコーナーが設けられている。また、北大の教員が推薦・コーディネートした本を紹介する「学びの窓」もある。

「本を読むことは、自分自身で想像するという意味で非常に能動的」館長の紺野宏子さんは、本を読むことの価値についてこう話す。本を読むとき、読者は自らの経験や憧れをもとに、それぞれ異なる世界を思い描く。映像などが「決められたものを受け取る」側面を持つのに対し、本は自分自身で世界を想像する余地がある。

AIやデジタル技術が急速に発展する今だからこそ、自ら考え、想像する力を育てる読書の意味は大きい。今回の施設には、子どもたちが本と出会い、読書を始めるきっかけとしての役割も期待されている。

北海道から広がる景色

館内では「北海道に生きる」という視点を大切にされている。中谷宇吉郎氏や小林快次（よしつぐ）氏の著作をはじめ、『動物のお医者さん』など北海道に関わる作品が並ぶ。絵本から大人向けの専門書まで幅広くそろえることで、子どもたちが成長しながら読書の世界を広げられるよう工夫されている。

さらに、バンクシーや音楽、ファッション、建築、経済、法律など、社会や世界を知るための本も多い。

「未来をつくる」をテーマに、デジタル技術やインフラ、宇宙に関する本も並ぶ。興味を持った一冊を手に取ることが、次の疑問につながる。そして、その疑問が新しい本や学問との出会いに広がっていく。ここには、読書を単なる知識の習得で終わらせず、好奇心を育てる入口にしたいという思いがある。

森の隠れ家

建物そのものも、子どもたちの好奇心を刺激する。森の中にあることを意識して設計され、木々をできるだけ避けるように曲線を描く建物は、森の中を進んでいくような感覚を生み出す。本棚が木の枝のように広がる空間も特徴的だ。

安藤氏が「こども本の森」を手がける背景には、子どもたちに本を手に取ってもらい、想像力や好奇心を育んでほしいという思いがある。北大のBe Ambitiousという理念への共感も、今回の施設につながった。

北大が遺骨収集を開始したのは1931年。解剖学や人類学研究のために始め、1933年以降は同じく医学部の児玉作左衛門元教授も収集を行っている。中でも児玉元教授は約500体もの遺骨を収集したとされる。収集は、両教授の退官後も1972年まで続けられた。2019年の文部科学省発表によれば北大が収集した「個人が特定できる遺骨」は942体で、国内の大学が集めたアイヌ遺骨全体の約6割を占めた。

これらの遺骨は1980年以降にアイヌに関係する人々によって返還請求がなされ、当初は拒絶していた北大も対応を迫られることとなった。北大は1984年に北大アイヌ納骨堂を建立し毎年慰霊祭（イチャルパ）を行うほか、遺骨の一部については返還を進めてきた。また2019年には返還請求のない遺骨が民族共生象徴空間（ウポポイ）に集約された。こうした対応の間、2005年と2019年には当時の北大トップが「反省」を表明したが、「謝罪」の言葉はなかった。

だが2019年に札幌医科大、2025年10月に東京大が先住民族の遺骨収集に関して初めて謝罪。北大に次いで多数の遺骨を保管していた2大学が謝罪に踏み切ったことで、潮目が変わったと見られる。さらに創基150周年を控えるなか、市民団体や約100人の教職員が謝罪を求める声を強めてきた。こうした学内外の要請の積み重ねが今回の総長声明を後押しし、これまでの「反省」表明とは一線を画す「お詫び」の言葉に繋がった可能性がある。

アイヌ関連団体からも、今回の謝罪を好意的に受け取る声が上がる一方で、遺骨返還請求が始まって半世紀近く謝罪が行われなかった点を批判する声も多い。

また今後の展望も不透明だ。北大は、アイヌの団体が呼びかける「真実委員会」への参加を見送った。国の返還ガイドラインに沿って対応するためであり、東京大や京都大も同様の立場をとるが、ガイドライン自体の実効性には疑問も残る。

さらに、学術的研究に対する再検証も求められる。例えば1980年にアイヌの海馬沃博（かいばよくひろ）氏が行った返還請求に対し医学部は「故児玉教授の研究活動に違法な点はなかった」として返還を拒否した。だがこれは、アイヌの墳墓を「現在は墳墓の役割を果たしていない遺跡」として刑法の適用外にしたうえ、児玉元教授が北海道警察の取り調べを受けた際に道と交渉し「土地の管理者の承諾」があれば良いものと決めたに過ぎない。報告書では適法行為か否か法的検証の十分さには言及がなかった。

今回の謝罪はアイヌの人々の尊厳を傷つけたことや遺骨収集の非倫理性を認めるものではあるが、墓地を暴き遺骨を持ち去った行為について当時の違法性を認めたものではない。大学研究の権威を後ろ盾に適法とは言い難い行為が行われる事態はどの時代でも懸念すべきであり、今後はそうした広範な視点からも、遺骨収集問題と向き合い続けていく必要があるだろう。

そして大学教育においても、この謝罪を幕引きとしない努力が求められる。北大の定める導入科目「北大での学び」では今後も北大とアイヌの関係性・歴史に言及しつつ、単なる歴史上の問題ではなく現在進行形で向き合うべき問題として説明がなされるべきである。学生側も「なぜ謝罪が大きな変化と見なされるのか」という小さな疑問を発端に、問題の全容に深い関心を持つことが求められるだろう。

北大が150年の歴史の中で積み上げてきたのは、輝かしい業績だけではない。なお解決を見ない現在進行形の課題に対し、大学構成員として、研究者として、大学として行うことは数多く残されたままだ。

（取材・執筆：古谷）

北大総長アイヌ遺骨収集を謝罪
150年の歴史で初

北大の賓金清博総長は7月27日、北大医学部によるアイヌの遺骨収集問題をめぐり記者会見を行い、「アイヌの人々の尊厳を深く傷つけた」として初めて公式に謝罪した。また8月3日には総長や副学長らがアイヌ協会の会合に出席し、先住民族の権利拡充に努めることを約束した。

今回の会見は、医学部の研究に関する3冊目の調査報告書の完成に合わせて行われ、大学トップが遺骨収集について正式に謝罪の言葉を口にしたのは初めてである。調査報告書では、当時の研究が「特定の民族を身体的・精神的に劣っているとする姿勢」を欠いていたと認めた。

子どもたちが見つけた一冊

訪れた子どもたちからは、「また来たい」「面べものをするときに来たい」といった声が聞かれた。『エルマー』シリーズ、『船を編む』など、興味を持つ本は一人ひとり異なる。本棚のデザインに興味を示す子どもたちも。

本を開けば、北海道から世界へ、自然から科学へ、物語から専門的な学問へと世界が広がっていく。

「こども本の森札幌・北大」は、本を読む場所であるだけではない。本は入口で、子どもたちの好奇心を大学、学問、社会、そして未来へとつなぐ場所だ。

（取材：佐藤・吉野・吉村　撮影：吉村　編集：山口　執筆：吉野）

広告サイズ 最大238mm!!※1
紙面ならではの幅で「北大生」に広告を届けませんか？
北大新聞はキャンパス内約30ヵ所で配布、SNSと違った層に届く！
北大新聞 広告
※1：下2段44行の場合の横幅サイズ

LOOKBACK 北大新聞 戦争の影は影であったのか

昭和18年（1943年）12月14日第295号

乖離した戦争像

戦争の実像を目の当たりにした兵士の手記や従軍記者が撮影した映像には戦争の惨状が克明に記録され、現在の私たちに強い反省を求めることができる。しかし、戦争の悲惨さをそれぞれのままに伝えることで、市民生活とは乖離した戦争像が構築される。この方法では「戦争を起こしてはいけない」という漠然とした判断をただ形作っているようにも感じる。

8月に入ると第二次世界大戦の記憶を風化させないために、様々な報道がされる。前述の手記や映像はこういった報道の代表格であるといえる。これら報道が国民の反戦意識を維持するのに有効であることは疑いもない。だが私には、往々にしてみられる「戦争を起こさないために私たちには何ができるだろうか」という話の帰結には疑問を抱く。

現代の私たちに求められる未来の行動とは、戦争の悲惨さに心を痛めながら、「戦争はだめだ」と思うことだけではなく、日常生活の輪郭を正しく見つめながら、戦争の兆候を鋭敏に感じ取ることであろう。そのために今必要なことは、戦火から距離を置きながらも、戦争を見つめ続けた人の経験談ではないだろうか。彼らの経験こそ、戦争の可能性を孕んだ現代日本の私たちにとっての糧となると思う。

赤道の真上で

今回選んだ記事は「セレベスの想出」という寄稿文だ。この記事は、『はしがき　1・メナドと落下傘部隊　2・赤道通過と敵機　3・カッサルと空襲　むすび』という構成で書かれた、北海道帝国大学助教授の宮脇恒氏の南洋渡航記である。

大きく3つに分かれているコラムでは行きの飛行機での話と滞在中の空襲の経験が描写されている。

宮脇氏は飛行機の中で戦争の姿を目の当たりにしながら、同時に日常が背中合わせであることを綴っている。

～～若き日夢にみた赤道、その赤道通過である、私は窓から海上を見下ろすと、みはるかす白雲漠々何と美しい積層雲であらう。～～やがて紙片が私の手に渡されて目を落としハツと我に返った「この辺りは〇日敵機（以降〇は識読不可）が出没してをります。乗客の皆さん窓から監視して怪しきものを発見したときは、直ちに通報してください。〇協力を願ひます」と書いてあるではないか。

宮脇氏が元来憧れであった赤道を通過することを感動的に描写し、南洋諸島の光景を飛行機の中から眺めた風景の美しさを語っている。しかし、しばらくした後に機長から紙をもらい今自分のいる空域が戦場であることと、そこにいる自分が戦争の当事者となったことにハッとする。

大学の仕事での延長にあるわけなので、それは仕事の一環だ。つまり、日常の予定表に組み込まれた用事の一つでしかないのだ。とはいえ彼に特別な経験を楽しみにする気持ちを持つなと言うのは無理な話だろう。

戦争中だから宮脇氏のような民間人が、軍人がいる場に居合わせるのは自然であろうか。軍人と民間人が肩を並べて飛行機に乗ることはあってよい事だろうか。このような問いを立てれば、それが正しくないことは一目瞭然である。個人的な旅行ではないから当然、空路での移動に軍の存在を感じないはずがない。

薄れゆく境界線

他にもこのような例はある。

宮脇氏がセレベスに到着し、当時首都であったマカツサル市のホテルにいた時のことだ。

俄然十時頃であつた。けたゝましい警戒警報のサイレンが真向ひの民政府の屋上から鳴り響いてきた、～～私は人々と共に直ちに地下防空壕に飛び込んだ。～～近くにも焼夷弾が落ちたらしい屈折してゐる入口から反射して〇内がパツト明るくなる。私の驚異は今一つある。それは現地の進出邦人が警報と同時に直ちに部署に走り軍、官、民まことに一致協力夫々の任務を果たし何等慌てふためく姿がないばかりか翌日は昨夜何事もなかつた様な顔で夫々の職場でそれぞれの本務に真剣に働いている凄い姿を見たことである。

この記述は戦争の日常化の最終形態を表している。地震に対する避難訓練であるかのように規範化された行動計画が日常に刷り込まれている。

防空壕に入る練習は危険から人々を守るためのものであるが、非日常であるはずの空襲を日常の中にあっても問題ないようにするための機構としても働いてしまう。背に腹は代えられない事態とはいえ、日常化の道筋としてこれほどまでに適しているものはないと考えざるを得ないのだ。

ここに含まれた戦争の姿は敵機の発見について連絡するチラシだけではない。空路で移動するときに軍人の姿が現れることや、北大・東京大・京都大・九州大から1人ずつ派遣されていることからも感じ取れる。

これらは宮脇氏が気にも留めない事柄であろう。なぜなら、彼は日常と戦争の同質化に慣れきってしまっているからだ。

非日常へ敏感に

彼は敵国の人間が現実に「そこにいる」ことを理解してやっと戦争の輪郭を掴んだものと思う。今の我々であれば、日常と戦争の輪郭が重なっていくことに、早い段階で気付けるのではないだろうか。

大学の数が今よりも極端に少なく、人材育成の場としての価値が重かった時代。大学の構成員が社会のエリートとして役割を認識していた時代。一般的な日本国民でありながら、帝国大学の教員という、政治の動向に少しばかり近い立場の見聞録は「今の」日本国民にとっては誰しもが学びを得ることのできる資料ではないだろうか。

「戦争を起こさないために私たちには何ができるだろうか」という台詞に少し手を加え、最後にここで再提起しよう。これを読むことのできる現代人、私たちは「戦争か否かに至る意思決定の主体を、民衆へと繋げるために何をすべきであろうか」

（取材・執筆：吉村）

戦後の日本と北大新聞

昭和20年（1945年）12月25日第302号

戦後の映像として思い浮かぶのは玉音放送を前にこうべを垂れる日本人、パイプ片手に日本に降り立つダグラス・マッカーサー、壊滅的な被害を受け今後70年は草木も育たないと言われた広島・長崎、そして焼け野原になった街を闊歩するアメリカ兵とチョコレートを求める子供。どれも「敗戦国日本」の悲壮さを表すものである。

これらの映像の報道が日本国民に戦争の代償と疲労感を鮮烈に刻み込み、国民の反戦意識を醸成するのに有効であることは疑いようがない。しかし、これらの報道には当時の日本人が戦争をどう捉え、敗戦をどう受け止めていたのかという視点が抜け落ちている。俯瞰的な視点のみが切り抜かれた敗戦国の現状が報道されているのではないか。

この欠落は、戦争当時の日本国上層部への憎悪や日本人の一方的な被害者意識といった歪んだ認識を生み出しかねないし、その渦中で生き続けた人々への無思慮につながる。

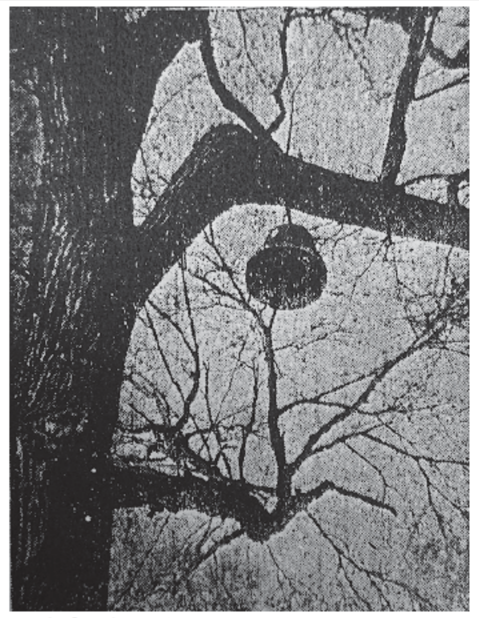
本記事では、戦後新たに北大総長へと就任した伊藤誠哉氏の就任演説及び取材記事を取り上げる。戦争と敗戦を同じ時間軸で体験した人物の戦争・敗戦についての当時の所感を知るうえで重要な資料といえる。

高揚、困惑と罪の意識

本論に入る前に、302号に取り上げられている「コラム民主主義と学生」を序論として紹介する。当時の北大・北大新聞の状況についての理解を深め、より鮮明に伊藤総長の記事を印象付けるものになることを期待する。

完全なる敗北とともに新日本建設の叫びはあふれ、衣食住の困窮は日に増大しつつ、日本は急激に〇（以降〇は識読不可）化しつつあるのである。〇〇極まりなきとき、我々は如何に進むべきであろうか。我々はあらゆる面において民主主義への変革が急速に行われつつあるのを知るのであり、我々学生の大多数は自由主義を得るにいたったのである。我々はあらゆるところにおいて、これらの衝突からすべては出達すべきであることを忘れてはならない。（以下略）

話題の人に会える!?
北大の「今」がわかる！
文理問わず大歓迎!!
THE MAINSTREET 北海道大学新聞編集部
新メンバー募集中！
ぜひ、北大新聞
活動に興味を持ったあなた！公式SNSのフォローをお願いします！（北大新聞の活動の様子や速報がご覧いただけます）▶▶▶▶



自由を響かす エルムの鐘（302号より）

「完全なる敗北」や「新日本建設の叫びはあふれ」といったように、当時敗戦処理真っただ中の日本に身を置いた学生の生の声を感じることができる。

注目すべきは3文目の「我々はあらゆる面において」から始まる一節だ。地主制度の破壊や、財閥解体など現実に起こっている事象を意識した文であると推察されるが、「行はれつつあることを知る」や「自由主義を得るに至った」という文からは日本人・学生のあずかり知らぬところで民主主義化、自由主義化が行われたという一種の疎外感が感じられる。

また、「これらの衝突からすべては出達すべきであることを忘れてはならない」という一文からは、学生という最もエネルギッシュな人間でありながら、戦争へと進む潮流に飲まれてしまった罪の意識を感じる。

当時の北海道帝國大学には突然与えられた民主主義・自由主義への高揚と困惑、そして戦争への負い目が混然と存在していたのかもしれない。

教育者として

伊藤総長は就任演説にあたり、戦前の教育行政への反省と「学問のための学問」の重要性を口にする。

もし教育が自由なる人格、自主的な思想、自発的な行動を目的として行われ、文化・水準・科学的知識が高まっていたら、敗戦はもちろんこんな戦争はしなかったであろう。それ故、教育は国家再建の始めであり、然りである。

われらが横穴竹槍練習をしている間に一見何の役にも立たない学者の一遊戯とみられたボア教授の原子物理学が大戦の終止符を打った。この一例からもわれらは真理の愛好、科学の尊さに見覚えねばならない。

と敗戦の原因をアメリカなどと比べて科学的水準が著しく低いことに求めており

大東亜戦初め、軍部及び国民は科学者を冷遇し学業を軽視して「行」をしないのを誹謗して（中略）非科学的教育を強要したのである。

と、その原因を軍部主導の実践重視主義として批判している。

注目すべきは、伊藤総長が「なぜ戦争が起こってしまったのか」ではなく、「なぜ戦争に負けてしまったのか」と繰り返し述べている点である。演説からは「科学を重視すれば、敗戦などしなかったのに」という後悔が読み取れる。

もちろん序文で「敗戦はもちろんこんな戦争はしていなかった」と書かれている通り、伊藤総長が戦争行為を肯定しているわけではない。ただ、戦争の渦中に身を置き、日本の勝利と栄光を望み信じていた多くの日本人のうちの一人であることに疑いようがないだろう。

眼前にそびえる食糧難

――記者

食糧難は深刻なものがあり委員会を設けて活動を開始しているとのことですが、第一回は根本的な問題に取り掛かれなかった。もっと進むべきと思っている。問題は来年収穫期までいかにして学生職員の食糧を確保するか、それまでにいかにして増進するかである。

記者の問いはまさに北大生の叫びであろう。民主主義や自由が与えられても飢えれば気力なく死を待つだけであり、解決してほしい喫緊の課題である。

――総長

在来学生皆配を願っても許されぬ理由は、もし学生に許すとすれば中学生以下にもすべて許すべきであるというが、これは一を知って二を知らざることと思う。食糧事情は全く異なるが皆配を行うとすれば、学業と闇とは並立することができず、終いにはリュックで畑の棚残りの籾殻を水炊きにして食べている悲惨なるものもいるということになるのである。

総長の意見は、こと食糧については根本的解決についての対策を講じる前に致命的な問題の解決・解消を優先して行うべきであり、今のところ委員会の方針を変えるつもりはないというものだ。根本的解決には時間を有するため、時間が限られている状況で目前の学生を助ける事に注力するという意見には筋が通っている。加えて伊藤総長は

――総長

いやしくも教育の府たる大学では闇はできない。学生3500名、職員2300名に給飯を一回やらんとすれば闇どころか公々然となり、合法的に獲得せんとすることにも全く不可能という悩みがあるのである。

と苦しい胸中を吐露する。

学生の困窮は自分の身が張り裂けるように辛いが、かといって学問の府として国に隠れて違法なことをするわけにはいかない。水に囲まれながらも干からびる漂流者の気持ちであろう。

理文併合の悲願

北海道帝国大学は札幌農学校から続く、自然科の系譜の大学であり人文科を備えていなかった。台北帝国大学以前に作られた7帝国大学のうち人文科を備えていないのは、北海道帝国大学のみであったため、戦前から人文科の設置は悲願であったと言える。

――記者

大学自体として法文科設置に関しては

――総長

これについては事務局長が文部省などに行っているが、当然人文科と自然科の併行しないのは大学としての完全なる体系ではない。こうした時代には人間を作る点からも人文科のないのは意味をなさない。設備に関しても時偶が逼迫（ひっぱく）しているので困難だが断然やりたい。財閥もなくなるが、資金がないとてできないことは愚でそこは技術である。金はないから出来ぬとあればどうか。建物がないとあればどうかと進めていくべきだ。

教育制度再編の中で、何としても人文科と自然科を併合した大学へと変えてゆこうという気概が感じられる。結果、伊藤総長の在任期間であった1947年に法文学部の設置を果たし、就任時に大学新聞で述べた構想を実現することになる。

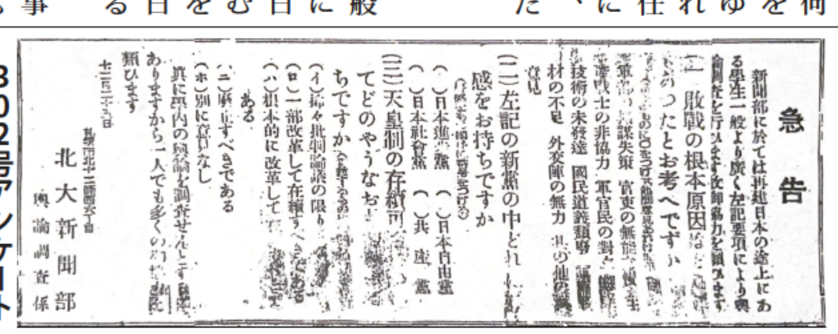
小さなともしび

伊藤総長の弁からは一般に想起されるような戦争により疲弊し、悲嘆に沈む日本人像は感じられない。むしろ現状の苦しさや辛さを薪として燃やし、新たな日本を建設していこうとする信念が感じられる。

もちろん戦火により大事な人を無くし、住む場所も食べ物も失った人がいることを忘れてはいけない。しかし逆境の中、苦しくても辛くても立ち上がり前を向き燃えるように突き進んだ我らの恩人たちのこともまた忘れるべきではない。敗戦という闇の深さは、その中で輝く小さなともしびを見つけることを困難にする。しかし、彼らの生きた証はこの記事のように各所に刻まれている。その業績を一つ一つ見つめなおすことが正しい反戦意識を醸成し、その渦中で生き続けた人々を等身大に理解することにつながる。

終戦のかほり

302号の最後には以下のようなアンケートが付されている。



急告

(二)左記の新黨の中どれに好感をお持ちですか

(三)天皇制の存續について

北大新聞部　輿論調査係

302号アンケート

政党政治の復活を思わせるような質問や、天皇制の存続について可否を問うものが見受けられる。

自由の鐘

敗戦といふ夢想だにしなかった現実によつて得られた学問の自由、その代償はあまりにも大であった。我々は再び鳴りわたる学問のエルムの鐘に耳をすまし、開学の恩人クラーク氏の言葉、ボーイズ ビー アムビシアウスを繰返へさう。

（取材・執筆：山口）



